難波西鶴と海の道【28】

機密事項あった？

あまり描かれなかった佐渡

森田　雅也

佐渡の話をしていましたが、西鶴『武道伝来記』（貞享4（1687）年刊）巻五の三「不断心懸けの早馬」の事件発端部に佐渡の国が出てきます。

佐渡の奉行に仕えていた大番頭の椿井民部は、ある時至急の御用で召されたので、早馬で道を急いでいました。その時、綱島判右衛門とすれ違いましたが、下馬せず、「判右衛門殿、鐙をはずしました」と言い捨てて、先を急ぎました。

武家同士の礼儀では、身分にかかわらず、馬上で人とすれ違う場合、下馬して礼をとるのが作法でしたが、急いでいる時には「鐙をはずす」ことで、その代わりとしていました。

椿井民部のとった行為は作法にかなったものですが、その言葉を綱島判右衛門は聞き取れず、民部の行為を無礼として一方的に腹を立て、一門集めて、どういう意趣返しをすべきか相談をしました。

一族の長老は、民部3千石、判右衛門300石であるからといっても、民部は人を見下すような人物ではないから、きっと「鐙をはずしました」と言葉をかけたはずだと冷静さを求めたのですが、判右衛門は聞き入れず、許せぬ怒りを書状にして、民部に届けます。

民部は声をかけたものの、それが聞こえなかったでは仕方ない、この上は果たし合いで結果を出そうと日時と場所を提示します。

この経緯を聞いた者があって、奉行に報告したところ、奉行は2人の行為は武道の道にかなっていると仲裁し、2人はこの上意をありがたく受け止めます。

物語はここで終わらずに、椿井民部が佐渡を勝手に出奔して、江戸に向かう話になるので、佐渡から離れた話となります。

西鶴当時、佐渡金山の労働者は、佐渡近郊の者から流刑人に変わってきていましたので、機密事項もあり、あえて、佐渡の町の詳細を書かなかったのかも知れません。

それなら、代わりに西回り航路の寄港地として当時繁栄していた「新潟港」あたりがもっと書かれていても不思議ではありませんが、西鶴作品には、ほとんど出てきません。

西回り航路としては、酒田を出て、能登半島を、石川県の輪島、福浦（石川県羽咋郡富来町の地名）といった港経由で越え、兵庫・中国瀬戸内海へと向かうために偶然寄る調整の寄港地だったので、目的の地ではなく、主役になりづらかったかも知れません。

『奥の細道』でも、新潟地域自体をあっという間に通り過ぎてしまいますが、新潟地域は東北文化圏と北陸文化圏をつなぐ連絡路のような役割だったのかもしれませんね。

（関西学院大学文学部文学言語学科教授）